

東京だより

太宰治

青空文庫

東京は、いま、働く少女で一ぱいです。朝夕、工場の行き帰り、少女たちは二列縦隊に並んで産業戦士の歌を合唱しながら東京の街を行進します。ほとんどもう、男の子と同じ服装をしています。でも、下駄げたの鼻緒はなおが赤くて、その一点にだけ、女の子の匂においを残しています。どの子もみんな、同じ様な顔をしています。年の頃さえ、はつきり見当がつきません。全部をおかみに捧げ切ると、人間は、顔の特徴も年とし恰好かっこうも綺麗きれいに失ってしまうものかも知れません。東京の街を行進している時だけでなく、この女の子たちの作業中あるいは執務中の姿を見ると、なお一層、ひとりひとりの特徴を失い、所謂いわゆる「個人事情」も何も忘れて、お国のために

精出しているのが、よくわかるような気がします。

つい先日、私の友人の画かきさんが、徴用されて或る工場に勤める事になり、私はその画かきさんに用事があつたので、最近三度ばかり、その工場にたずねて行きました。用事というのは、こんど出版される筈の私の小説集の表紙の画をかいてもらう事でしたが、実は、私はこの画かきさんの画を、常々とても馬鹿にしていて、その前にも、この画かきさんが、私の小説集の表紙の画をかいてみたいと幾度も私に申出た事があつたのに、私は、お前なんかには表紙の画をかかせたら、それでなくても評判の悪い私の本は、一層評判が悪くなつて、ちつとも売れなくなるにきまつているから、まあ、ごめんだ、と言つて、はつきりお断りして来てい

たのでした。実際、そのひとの画は、下手くそへたでした。けれども、こんど工場へはいり、いまこそ小説集の表紙の画を、あらたな思いで書いてみたい、というひどく神妙な申出に接して、私は、すぐに彼の勤めている工場へ画をかいてくれ、と頼みに出かけたのです。画が下手だつてかまわない。私の小説集の評判が悪くなつたつてかまわない。そんな事はどうだつていい。私なんかのつまらぬ小説集の表紙の画をかく事に依よつて、彼の徴用工としての意気が更にあがるというならば、こんなには有難い事は無い。私は彼の可憐なお便りを受取つて、すぐに彼の勤め先の工場に出かけた。彼は大喜びで私を迎えてくれて、表紙の画に就いての彼の腹案をさまざま私に語つて聞かせた。どれも、これも結構でなかつた。

実に、陳腐^{ちんぷ}な、甘つたるいもので、私はあつけにとられたが、しかし、いまの此^この場合、画のうまいはずいは問題でない。私のこんどの小説集は、彼の画のために、だめになつてしまふかも知れないが、でも、そんな事なんか、全くどうだっていいのだ。男子意気に感ぜざればとかいう言葉があつたではないか。彼は、そのつまらぬ腹案を私に情熱^{もつ}を以て語つて聞かせ、またその次には、さらにつまらぬ下書の画を私に見せ、そのために私は彼からしばしば呼出しを受けて、彼の工場に行かなければならなくなつたのです。

工場の門をくぐつて、守衛に、彼から来た葉書を示し、事務所へはいると、そこに十人ばかりの女の子が、ひっそり事務を執^とつ

ています。私は、その女の子のひとりに、来意を告げ、彼の宿直の部屋に電話をかけてもらいます。彼は工場の中の一室に寝起きしているのであつて、彼の休憩の時間は彼の葉書に依つてちゃんと知らされていますから、私はその彼の休み時間に、ちよつと訪問するといふわけなのであります。彼が事務所にやってくるまで、私は事務所の片隅の小さい椅子に腰かけて、ぼんやり待っているのですが、実はそんなにぼんやりしているのでもなかつたのです。私は、目の前で執務している十人ばかりの女の子を、ひそかに観察していたのです。みんなもう、見事なくらい、平然と私を黙殺しています。女の子から黙殺されるのは、私も幼少の頃から馴なれ

ていますので、かくべつ驚きもしませんが、でもこの黙殺の仕方

は、少しも高慢の影は無く、ひとりひとり違つた心の表情も認められず、一様にうつむいてせつせと事務を執つているだけで、来客の出入にもその静かな雰囲気は何の変化も示さず、ただ算盤そろばんの音と帳簿を繰る音が爽やかに聞こえて、たいへん気持ちのいい眺めなのでした。どの子の顔にも、これという異なつた印象は無く、羽根の色の同じな蝶々がひっそり並んで花の枝にとまっているよ
うな感じなのですが、でも、ひとり、どういうわけか、忘れられない印象の子がいたのです。これは、働く少女たちの間では、実に稀まれな現象です。働く少女たちには、ひとりひとりの特徴なんか少しも無い、と前にも申し上げましたが、その工場の事務所にひとり、どうしても他の少女と全く違う感じのひとがいたのです。

顔も別に変っていません。やや面長の、浅黒い顔です。服装も変っていません。みんなと同じ黒い事務服です。髪の色も変っていません。どこも、何も、変っていません。それでいて、その人は、たとえば黒いあげは蝶の中に緑の蝶がまじっているみたいに、あざやかに他の人と違って美しいのです。そうです。美しいのです。何のお化粧もしていません。それでも、ひとり、まるで違って美しいのです。私は、不思議でなりませんでした。白状すると、私は、事務所であの画かきさんを待っているあいだ、その不思議な少女の顔ばかり見ていました。これは、先祖の血だ、と私はもつともらしく断定を下して、落ちつく事にしました。その父か母に昔から幾代か続いた高貴の血があつて、それゆえ、この人の何の

特徴もない姿からでもこんな不思議な匂いが発するのだ。実に父祖の血は人間にとって重大なものだ、などと溜息ためいきをついて、ひとりひとで興奮していたのですが、それは、違いました。私のそんなひとりひとで興奮しては、見事にはずれていました。そのひとひとの際立きわだった不思議な美しさの原因は、もっと厳肅な、崇高とっていいほどのせつぱつまつた現実の中にあつたのです。或る夕方、私は、三度目の工場訪問を終えて工場の正門から出た時、ふと背後に少女たちの合唱を聞き、振りむいて見ると、きょうの作業を終えた少女たちが二列縦隊を作つて、産業戦士の歌を高く合唱しながら、工場の中庭から出て来るところでした。私は立ちどまつて、その元気な一隊を見送りました。そうして私は、愕然がくぜんとしました。あの

事務所の少女が、みなからひとりおくれて、松葉杖をついて歩いて来るのです。見ているうちに、私の眼が熱くなつて来ました。美しい筈だ、その少女は生れた時から足が悪い様子でした。右足の足首のところがいや、私はさすがに言うに忍びない。松葉杖をついて、黙って私の前をとおって行きました。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成1）年2月28日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：山本奈津恵

2000年9月19日公開

2005年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

東京だより

太宰治

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>